

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の基本構造編

【第6回】語気詞編

およそ高校の授業で学ぶ漢文で、一番いいかげんに取り扱われてる品詞が、この語気詞だよ。

疑問とか反語、限定なんかでは一応説明するんだが、それ以外ではとんと無視というのが実情だ。

それにはしかたがない事情もあって、訓読では置き字とかいつて読まない字があるだろう？

その多くが語気詞だからなんだ。

訓読は、漢文という他国語をそのまま日本語読みしようという工夫だから、細かいところにはわざとこだわらずに、できるだけシンプルに読む。

その意味で、文意を大きく左右する疑問とか反語、限定の語気を表す語は読むけど、そうでないやつはあえて読まずに済ますわけ。

これはこれでなかなか見事な合理的判断なんだよ。

だが、注意してほしいのは、訓読で読まないから、文末の「矣」とか「焉」とかには意味がないんだなんて思っちゃいけないってこと。

漢文は、すべての漢字に意味か働きがあるんだ。

逆にいうと、意味も働きもない漢字なんて、ただの1字もないってことだ。

たとえば日本語で、「それは君の仕事だ。」という文があったとして、「それは君の仕事だよ。」とか「それは君の仕事だぞ。」とか、あるいは、「それは君の仕事だね。」とか、我々だって色んな語気を添えて表現するだろう？

でも、これは結論からいえば、「それは君の仕事。」という意味で、ほぼ文意を理解できる。

でも、「それは君の仕事か？」とか、「それは君の仕事か？（いや、違うだろう？）」とかは、はっきり意味が違ってくる。

疑問や反語を無視するわけにいかないのは、納得できたかい。

我々が助詞を使ってさまざまな語気を表すように、漢文も語気詞を使って色んな語気を表すんだ。

つまり、語気詞を丁寧に見ていくことで、訓読だけでは伝わりにくい表現者の気持ちに近づけるってことさ。

1. 文頭で用いられる語気詞

君たちも何かこれから自分の意見を述べ始める時に、最初に言う言葉があるだろう？

たとえば、「そもそもさあ…」とか「だいたい…」とか、「いったい全体…」とか。最近は「ってゆうかあゝ」なんてのもあるな… ありやいったい何なんだ？ 必ずしも「言い換えると」って意味でもなさそうだし。一種の若者特有の語気詞なのか？ なんだあれ、そういう言葉がある。

これと同じように、漢文にも文頭で用いる語気詞があるんだ。

夫^レ学者、猶^ホ種^{ツル}樹^カ也。ゝ

▼夫^それ学^{がく}は、猶^なほ樹^きを種^ううるがごときなり。ゝ

▽そもそも学問は、木を植えるのと同じである。ゝ

右の文頭、「夫^レ」は、議論を始めたり総括したりする時に用いる語気詞だ。

議論を開くから発語の辞といたりする。

我々は「それ」と読んで、「そもそも」とか「いったい」とか訳す。

「夫^レ」という漢字は、もともとは別の意味「一人前の男子」を指す字なんだが、「かれ」とか「あの・この」の意味の代詞の音に近かったから借用されるようになったんだ。

だから、文脈によっては「かノ」と読んで「あの」とか「その」とか訳すこともあるんで気をつけなきゃいけない。

発語の辞として用いられる時は、もうその指示代詞としての働きが弱まりほとんどなくなつて、議論を始める語気しか表さないんだ。

でも、この発語の辞としての「夫^レ」も、代詞の働き「あの」から「あの皆の常識の」のように転じて生まれたんだろうね。

まあ、君たちの場合は、とりあえず、「それ」って読み方と「そもそも」って訳し方を覚えとくと共に、それから先に大事なことが述べられるってことを知っておいてほしい。

蓋^レ人、目之所^ハ見^ル、不^レ過^キ二十里^ヲ。

▼蓋^{けだ}し人^{ひと}の目^めの見^みる所^{ところ}は、十^{じふ}里^りを過^すぎず。

▽そもそも人の目がみる範囲は、十里を越えない。

「蓋^レ」も議論を始める時に用いる発語の辞で、やっぱり「そもそも」、「いったい」などと訳す。

ところで、本当のところを言うと、「けだし」という訓はあまり適切じゃないんだな。

実は「けだし」って日本語は、はっきりしないことや疑わしいことを表す副詞で、「ひよっとしたら」と

か「たぶん」ぐらいの意味を表すんだよ。

そして漢語の「蓋」は発語の辞とは別に推定の副詞としても用いられて、その場合の訓が「けだし」にびったりあてはまる。

ところが、それ以外の場合、つまり今ここで説明してる発語の辞の場合でも、同じ漢字だから「けだし」と読まれるようになったわけで、いわば訓読の習慣なんだよ。

だから、「文頭に『蓋』が出てきたら、『けだし』と読んで『思うに』と訳せ！」という乱暴な先生があつたりするんだが、実はそのへんの事情がわかってないんだな。

◎ポイント……「夫」^そ「蓋」^{けだし}は文頭に置かれる語気詞。これから議論を始めたり、総括したりする時に用いる。読み方にも注意！

2. 文中で用いられる語気詞

「青春はいいものだ。」って言いたいとき、そのままでもいいけど、「青春ってのはな、いいものだ。」なんて強めていうこともできるだろ？

漢文でもそういうことあるんだ。

文中で用いられる語気詞としては、君たちには「也」を覚えておいてもらおうか。

回也 不愚^{ナラ}

▼回^{へい}や愚^ぐならず。

▽回（＝顔回）は愚かでない。

「回」ってのは、第1回の講義の時にも出てきた孔子の弟子の顔回^{がんかい}のこと。

お弟子さんの中で一番賢いと孔子が認めた人だったね。

この文は「回^ハ不^レ愚^{ナラ}」が普通の文だよ。

その主語「回」の後に語気詞「也」を置き、**主語を提示すると共に、語調をいったんポーズして緩やかにして、後の「不愚^{ナラ}」という叙述を待つ働きをしてるんだ。**

あえて訳せば「回はなあ」とか「回はね」ぐらいの意味になるかな？

でも、普通は無理には訳さないんだ。

訓読では「や」と読む。

「なり」と読んじやいかんよ。

賜也、始可^{メテ}与^ニ言^フ詩已^リ矣。

▼賜^しや、始めて与^{とも}に詩^しを言^いふべきのみ。

▽賜よ、やっとお前と詩経について語ることができるよ。

「賜」も、孔子の弟子^し子貢^{こう}のこと。

これも高弟で、弁舌さわやかな人物だ。

名前の後に同じ語気詞「也」が置かれてるが、ここでは「賜よ」って呼びかけを表してるんだ。同じ語気でも、文脈で違う働きをするんだな。

この場合も「や」って読むんだが、「賜也」と孔子が呼びかけてるんだな。

「賜」って言い切るより、「賜也」って呼びかけて、いったんポーズを置いてるんだよ。

ポーズを表す「也」は他に、句を受けることもあるぞ。

古之聖人、其出^{ツル}人也^ヤ、遠^シ矣。

▼古^{いにしへ}の聖人^{せいじん}、其^その人^{ひと}を出^いづるや、遠^{とほ}し。

▽昔の聖人は、その人を抜きんでることが、遠かった。

「其出^{ツル}人^ヤ」という句を受けて、やっぱりポーズを表し語調を緩やかにした上で、後文を導いてる。

あえて訳せば「その人を抜きんでることがね」などとなるんだが、普通は訳さないな。

でも、そんな感じなんだって、わかつとけ。

◎ポイント!…文中に置かれる語気詞「也」は、主語を提示したり、語調をいったんポーズして緩やかにしたりする働きをする。「なり」とは読まないので注意!

3. 文末で用いられる語気詞

語気詞の中では、この文末で用いられるやつが一番多い。

しかも、確認、肯定的判断、完了、推量、疑問、反語、感嘆詠嘆など、実にさまざまな語気がある。

だから「この語気詞はどんな気持ちを伝えてるのかなあ…」というふうに注意を払えば、表現した人の感

情とか口ぶりが身近に迫る。

つまり表現の豊かさを知る手がかりになるわけ。

ただ、あまりにも種類が多い上に、同じ語気詞でも文脈からさまざまな語気を表すから、それをここで全部説明したら日が暮れちまう。

しかたがないから、ここでは代表的なものを紹介するにとどめておこう。

ただし、忘れるなよ、すべての漢字に意味がある、1字たりとも無駄な漢字はない。

そして、その1字々々に注目してきちんと理解していくのが、この先生の漢文の講義なんだぜ。

①文末で用いられる語気詞「也」

まず、みんながよく見かける「也」から説明しようかな。

文中でも用いられる「也」だが、文末に用いられた時は、確認・断定や肯定的判断、原因や目的・動機を述べる語気を表したり、禁止や命令文の文末でも用いられて、実にさまざまな語気を表すんだ。

管仲夷吾者、潁上人也。

▼管仲夷吾は、潁上の人なり。

▽管仲夷吾は、潁上（出身）の人である。

「AはBである。」という判断文の文末に「也」を置いて、**確認（断定）の語気**を表してる。

この場合、日本語だと「だ」とか「である」に相当するから、日本語の断定の助動詞「なり」と訓読するんだ。

いいかい？ 「なり」と読んでいるから「だ・である」と訳すんじゃないかって、断定の語気を表してるから「なり」と読んでるんだぜ。

子無敢食我也。

▼子敢へて我を食らふこと無かれ。

▽あなたは私を食べようとしてはいけない。

またまた「虎の威を借る」からのこの例は禁止文の文末に「也」が置いた形だ。

これは**判断の語気を相手に向けた**もんなんだよ。

「いけないだよ」ってな感じだな。

禁止以外にも、命令、請願などの文なんかも用いられる。

この場合は、訓読の最後を命令形で読んでも関係で、「也」を置き字として扱って、読まないんだ。「無かれなり」なんて読むなよ。

ただ、誤解しちゃうだけだぜ、読まないのは日本人だけ。中国人はちゃんと読んでるんだ。

訓読の都合、つまり日本語の都合で読まないだけだよ。

何^ソ前^{ニハ}倨^{リテ}而^{ニハ}後^{シキ}恭^{シキ}也^也。

▼何^{なん}ぞ^{さき}前^{まえ}には^{おこ}倨^こりて^{のち}後^{うしろ}には^{うしろ}恭^こしき^{きや}や。

▽どうして以前は傲慢で今は丁寧なのか。

これは疑問文に用いられている。

疑問自体は疑問代詞「何^{なん}」が表して、「なんで〜丁寧なのだ」の「だ」にあたる語気が「也」で、やはり判断の語気だと思う。

でも、訓読では「や」と訓読して「〜か」などと訳すんだ。

もちろん訓読という日本語の事情によるんだ。

反語でも用いられるな。

ところで、この例文は有名だから、久しぶりにちょっと脱線しところか。

戦国時代の縦横家、蘇秦の逸話だな。

知ってる人も多いだろう？

縦横家つてのは、巧みな弁論を武器に諸国を巡り歩いた外交の策士たちだよ。

その代表格がこの蘇秦なんだが、初めはうまくいかず、困窮して故郷に帰ってくると、まあ家族の冷たいこと！

奥さんは無視だし、兄嫁は食事の用意もしてくれない。

ところが、対秦南北同盟、つまり合従策を成立させて、6つの国の宰相を兼ねる大成功をおさめて帰郷すると、親戚一同、目も合わせられないありさまだったんだ。

それで蘇秦が言ったセリフがこれ。

「なんで前はあんなに傲慢だったのに、今はへりくだっておられるわけ？」

そしたら兄嫁、「あなたが位も高くお金持ちになられたからです」なんて言う。

蘇秦はため息ついて、「富貴だと親戚も畏れ、貧賤だと馬鹿にする。まして親戚以外の一般人だったらなおさらだ。もし私が豊かな田地のひとつも持っていたら、こんな富貴になれなかったよ。」と言って、親戚一同に大金ばらまいたってお話だ。

ま、あんなたちが冷たくしてくれたおかげって言いたいわけだが、嫌みだよなあ…

さて、話を元に戻そう。なんだっけ？
そうそう「也」の用法だったね。

何^{ナニ}楚^ソ人之多^{オホキ}也^ナ。

▼何^{なん}ぞ楚^そ人^{ひと}の多^{おほ}きや。

▽なんと楚の国の人がこのように多いことよ。

最後は、感嘆・詠嘆文の文末に「也」が置かれる例だ。

これも「どうして楚人がこのように多いのだ」が元で、楚人が多いの「だ」という判断の語気を「也」は表していると見るべきだろう。

この場合も「なり」と読まず、「や」と訓読して、「ことよ」などと訳すんだ。

「也」自体が疑問や反語、詠嘆の語気を表すという学者もあるし、巷の参考書や辞書にはそう述べられているのが多いんだが、果たしてどうだろうね。

このためぐち先生は、はなはだ怪しく思うぞ。

さて、この例文も有名だなあ…

2年生の教科書に必ず出てくる四面楚歌のお話だよ。

沛公、すなわち劉邦の軍勢に完全に追いつめられた項羽が、垓^{がい}下のとりでに立てこもった夜、四方から聞こえてくる祖国楚の歌声に驚いて言ったセリフがこれ。

楚の兵士がみんな敵の捕虜にされて、歌ってんのか！

そう思ったのかな…

まあ冷静に考えれば、項羽が動揺するようなこと、いくら捕虜になったって味方の連中がするわけないんだが、これが漢軍の策だったことも教えてやれる軍師がいなくなっちゃったのか…

なんであれ、項羽はもはやこれが最後の夜になると悟って、酒宴を開くんだ。

「力は山をもぶち抜くほどで、気力は世を覆い尽くすほどだった。時勢は私に味方をしてくれず、愛馬の騅^{すい}も進まなくなった。騅が進まないがどうすればいいか。虞よ虞よ、おまえをどうしよう。」

そう歌って、愛する虞美人にも別れを告げるんだ。

そうそう、余談中の余談だが、この先生は昔、この項羽の歌を短歌にして「楚王」という歌物語を作ったことがあるぞ。

その中で項羽が歌った短歌を紹介しようか。

山を抜き気は蓋^{おほ}えども騅^{すい}逝^なかず汝^なれのいのちをいかにせんとや
なかなかうまく短歌になってるだろ？

さて、ここまでの説明でわかったと思うけど、「也」自体は判断の語気を表すんだが、判断、禁止、疑問、

反語、詠嘆を表す文では、読み方、はたまた読まないかが変わってくる。
注意しなきゃね。

◎ポイント……文末に置かれる「也」は、確認・断定や肯定的判断の語気を表す。判断文では「なり」、疑問・反語・詠嘆の文では「や」と読み分ける。訓読の都合で読まずに置き字にすることもある。

②文末で用いられる語気詞「矣」

「矣」もよく文末に用いられる語気詞だよ。

でも、みんなも気づいていると思うけど、「也」と違って読まないことが多いよな。
つまりほとんどの場合、置き字にされてるってこと。

だから、まあ極端な話、読んでない場合は無視したって大体の文意は通る。

学校の先生なんかもまるで無視して説明しないこともある。

でも、前も言ったように、語気詞は「表現した人の感情とか口ぶりが身近に迫る」大切な手がかりなんだ。
どんな語気がこもってるんだろって目をとめて、無関心派を1歩リードしようぜ。

さて、その「矣」、**完了や将来的判断、つまり推量や、必然的判断、必ずそうである・そうなっていると**
いう3つの語気を表すのが基本だよ。

その語気から詠嘆や、禁止・命令願望などの語気を表すことになるんだ。

吾^{われ}已^{すで}決^{けつ}矣。

▼吾^{われ}已^{すで}に決^{けつ}せり。

▽私はもう決めた。

右の例は、**動作行為の完了の語気**を表してる。

多くの場合、「既^{すで}」「已^{すで}」なんかの副詞と共に用いられるから見分けがつくぞ。

「矣」自体は普通置き字として読まないんだが、「決^{けつ}せり」だとか「決^{けつ}したり」などのように、直前に読む語の読みかたに日本語の完了の助動詞「り」「たり」なんかをつけて、完了の意味を反映させることがある。

これはまあわかりやすい例だ。

母^{カレ}ニ妄^{スル}言^セ、族^セ矣^レ。

▼妄^{ほうげん}言^{げん}する母^なかれ、族^{ぞく}せられん。

▽でたらめなことを言うな、一族皆殺しになるだろう。

この例では、「矣」はある状況や事情が将来発生するだろうって語気、つまり将来的判断の語気を表してる。

推量といったほうがわかりやすいかな。

この場合も、「矣」を置き字として読まず、「族せられん」のように、日本語の推量の助動詞「ん」をつけて、推量の意味を反映させて読むことがある。

雖^モ曰^{フト}未^ダ学^バ、吾^ス必^{ハシ}謂^{ハシ}之^ヲ学^ビ之^ヲ矣^レ。

▼未^{いま}だ学^{まな}ばずと曰^いふと雖^{いへど}も、吾^{われかなら}必^{これ}ず之^{まな}を学^{まな}びたりと謂^いはん。

▽（その人が）まだ学んでいないと言ったとしても、私は必ずその人を学んだと言おう。

右の例は、「あたかも女性を好むかのように賢者を好み、力の限り父母に仕え、全身全霊で主君に仕え、友人と交わって誠実である、そういう人であれば、」たとえ本人が謙遜しても、私は学問をしたものと認めるという意味だ。

そりゃ認めるわな…

ここで「矣」は、その必然性が十分に肯定できるという必然的判断の語気を表してるんだ。

まあただ「言う」って訳したって意味は通るからしかたないんだが、ニュアンスは多少違うかもしれないが、「言うぞ」って感じ？

日本語にも似たようなのがあるよな。

この場合も「矣」は置き字扱いだが、「学びたりと謂はん」のように、読みに意志の意味を反映させることがあるんだぜ。

子^ケ往^{カレ}矣^レ、無^ル乏^{コト}ニ吾^ガ事^ヲ。

▼子^し往^ゆけ、吾^わが事^{こと}を乏^{やぶ}ること無^なかれ。

▽あなたは行きなさい、私の仕事の邪魔をするな。

今度は、命令文や請願文の文末に「矣」を置いて、命令・請願の語気を強める例。

「将来行くだろう」という将来的判断の語気を相手に向ければ、「将来あなたが行くべきだ」とか「行ってほしい」という命令や請願の語気に通じるだろう？

つまり、ある行為が将来実現することを想定して、それを相手に対して請願したり禁止したりするわけだ。この場合は、訓読の最後を「うせよ」と命令形で読み、「矣」自体は置き字として扱って読まない。こんな「矣」になると、もう学校ではほとんど無視だよな。だけど、ちゃんと語気はこもってるんだぜ。

「行け」でも命令だけど、たとえば「行くべきだ」って感じかな？

君無^レ疑^フ矣^ト。

▼君^{きみ}疑^{うたが}ふこと無^なかれ。

▽君は疑ってはいけない。

命令文で使われることは、当然ながら禁止文の文末でも使われるわな。

この先「疑うことがない」という将来的判断の語気を相手に向ければ、「疑ってはいけないぞ」とか「いけないよ」という**禁止の語気**に通じる。

この場合も「矣」は置き字と扱いだ。

まあ文末を日本語の命令形で読む以上、「矣」を読みようがないよな。

甚^{ダシ}矣^シ、吾^{われ}衰^へタル^也。

▼甚^{はなは}だしいかな、吾^{われ}の衰^{おとろ}へたるや。

▽ひどいことよ、私の衰えたことは。

「矣」の字自体は、本来は詠嘆の語気を表すものじゃない。

でも、たとえば、「悲^{シキ}矣^{かな}」の場合、ある事実や状況に対して、すでに「悲しい」という状態になっている**完了の語気から、そのことに対して生まれてくる感情が詠嘆や感嘆の語気につながる**んだ。

この例でも「ひどい」状態になっちゃってる自分の衰えに対して詠嘆の気持ちが生まれてきてるわけだろ。ほかに「危^{あやフキ}矣^{かな}」のように、将来「危^{あやフキ}いことになるだろう」という**将来的判断の語気から、詠嘆の気持ちが生まれてくる場合もある**。

ちよつと注意が必要なのが、感嘆・詠嘆文の文末に置かれた場合の読み方だ。

感嘆・詠嘆の語気を表す場合は、「矣」を置き字とせずに「かな」と訓読するんだ。

そうしないと訓読上感嘆の語気が伝わらないもんな。

「甚^{ダシイ}矣^{かな}」と送り仮名を送って「矣」を置き字とすることもあるぞ。

ん？「甚だしきかな」じゃないのかって？

もちろんそれでもいいんだが、訓読では形容詞の後に「かな」をつける時、「善いかな」とか「久しいか

な」みたいに、イ音便化させることがあるんだよ、知つとけ。

徳何如則可_ニ以_テ王_{タル}矣_一。

▼徳何_ニ如_{ナレバ}なれば則_{スなは}ち以_テて王_ヲたるべき。

▽徳がどのような王となれるか。

「矣」は疑問や反語の文末に置かれることもあつて、その場合、**疑問反語の語気を強めることになる**。だから疑問反語の語気を表すとされることもあるんだが、それはどうだろうか。

疑問反語の意味は「何_{ナン}」とか「誰_{タレカ}」などの疑問代詞や副詞が表してるんであつて、「矣」が表すわけじゃない。

日本でも「どうしてそう思うのか」といえば「か」は疑問を表すけど、「どうしてそう思うのだ」の「だ」は別に疑問を表してるわけじゃないだろ？

この場合も「矣」は置き字として読まない。

◎ポイント……文末に置かれる「矣」は、完了や将来的判断（推量）、必然的判断、命令や禁止、感嘆詠嘆などさまざまな語気を表す。通常読まないが、完了や推量の場合は直前に読む語に語気を反映させて読んだり、感嘆詠嘆の場合は「矣」自体を「かな」と読む。

③文末で用いられる語気詞「焉」

「焉」は疑問や反語文の文頭に置かれる疑問代詞や反語の語気副詞として「いづくんぞ」とか「いづくにか」などと読まれるので有名なんだが、実は、語気詞として文末に置かれることも多いんだ。

もともと「焉」は「於此」2字分と同義の語で、いわば「これに」とか「これに対して」という具体的な意味があつたんだ。

その意味が薄らいで陳述・断定の語気詞になったわけだが、「ゝする、これにね」ぐらいの念押し働きから生まれた語気といえわかりやすいかな。

宅_ニ辺_ニ有_リ五柳樹_一、因_リ以_テ為_ス号_ト焉_一。

▼宅_ニ辺_ニに五柳樹_ニ有_リ、因_リりて以_テて号_トと為_スす。

▽家のそばに五本の柳の木があり、それにちなんで（五柳を彼の）号としたのである。

この例の場合は、「それにちなんだ号とした、これ（＝自分に）にね」という**陳述の語気**を表してるんだ。強めているといってもいい。

だから「号としたのだ」と訳すわけ。

ただし、この場合は「焉」を置き字として読まない。

大 国 之 憂_レ也、吾_ガ 儕_ヲ 何_ヲ 知_{ラン} 焉_。

▼たいこく 大 国_ノ の 憂_レ ひ な り、 吾_ガ が 儕_{せい} 何_{なに} を か 知_し ら ん。

▽ 大 国 の 心 配 事 で あ っ て、 我 ら に 何 が わ か る で し ょ う か。

「焉」は、疑問・反語文の文末に置かれることもあって、その場合、疑問・反語の語気を表すとされることがある。

でも、これも「也」と同様、疑問・反語自体は「何_{なん}」や「誰_{たれ}」などの疑問代詞や副詞が表しているんであって、「焉」自体はやっぱり陳述・断定の語気を表しているとすべきだね。

この例、あえて訳せば「我らは何がわかる、このことに対してね」から、「焉」の代詞としての働きが許可して「何がわかるのだ」という断定の語気を表すことになるわけだ。

文末に「焉」が置かれてる場合、ひとつ注意しなきゃならないことがある。

語気詞というより、もともとの「於此」の意味で用いられることがあるんだ。

たとえば、次の例の場合。

師 之 所_レ 処_ル、荊 棘 生_ス 焉_。

▼し 師_の の 処_を る 所_{どこ}、 荊_{けい} 棘_{きよく} 生_う ず。

▽ 軍 隊 の い る 所 は、 い ば ら が そ こ に 生 じ る。

実は、「荊棘生焉」は「荊棘生_ス於_ニ此_{こゝ}」と同じなんだ。

へ？と思つたら。

実は「焉」は「於此」と同義、つまり2字分を1字で表現したもんで、こついうのを**縮約語**っていう。だから、右の例の場合も、置き字とせずに「荊棘生_ス焉_ニ」と読んでもかまわないし、実際そう読まれることもある。

これはもうなかなか判別が難しくって、語気詞なんだろうか？それとも縮約語なんだろうか？って悩むよな…

はつきりしないことも当然多いよ。

ただし、次の形をとった場合は、語気詞じゃなく縮約語と決定！
入試問題にもよく出るから覚えとけ。

功莫^シ大^{ナルハ}焉^{ヨリ}。

▼功焉^{こうえん}より大^{だい}なるは莫^なし。

▽功績についてはこれより大きなものはない。

この文は「功莫^シ大^{ナルハ}於^ニ此^{ヨリ}」と同じ意味。

もし「焉」を縮約語で解釈しないと、文の意味が通らなくなるだろ？

つまりここで「焉」は**比較の対象**を表してるんだ。

「A 莫^シ B^{ナルハ}焉^{ヨリ}」の形をとる場合は「焉」は縮約語であって、必ず「これより」と読まなきゃならないこと。

比較の最大級を表す入試必須の知識だから忘れんな。

◎ポイント！…文末に置かれる「焉」は、陳述・断定の語気を表す。

・ももとの「於此」＝二字分の縮約語として用いられる場合もあるので注意。その場合は「これ」とか「ここ」と読む。

特に「A 莫^シ B^{ナルハ}焉^{ヨリ}」の形は比較の最上級を表し、「これより」と読むので、語気詞とはきちんと区別して理解しておくこと。

④文末で用いられ疑問・反語・詠嘆を表す語気詞「乎」「哉」「耶」「歟」など

実はこれからとりあげる「乎」とか「哉」、「耶」、「歟」なんか、教壇では一番力を入れて教えるものになるんだ。

疑問、反語、詠嘆などの語気を表すし、たいてい置き字ではなく、ちゃんと訓読するからな。

でも、この講座ではその真逆で、一番手抜きで行こう。

だって、この手の語気詞はもう無茶苦茶たくさんあるし、ニュアンスも微妙に違って、いちいち取り扱ってたら大変だからな。

それに、この語気は実は意外とわかりやすいんだ。

だから、大体の例を見せて、後は応用してくれて形で済みにしちゃうぜ。

王曰、賢者亦有此樂乎。

▼王曰はく、「賢者も亦た此の楽しみ有るか。」と。

▽王がおっしゃるには、「賢者もこの楽しみがあるのか。」と。

「賢者亦有此樂」だったら平叙文で、「賢者もこの楽しみがある」って意味だろ？
その文末に疑問の語気を表す「乎」という語気詞を置いたら疑問文になる。

これって、日本語でも同じじゃないか。

「楽しみがある。」なら平叙文だが、「楽しみがあるか？」って「か」をつけたら疑問文になる。
な？ 簡単だろ？

夫子聖者歟。

▼夫子は聖者なるか。

▽先生は聖人ですか。

これも文末に「歟」を置いて疑問の語気を表してる。

他にも、「邪」とか「歟」、「与」なんかが同じように疑問の語気を表すんだ。

ところで、これらの疑問の語気詞の訓読については、一応次のように読み分ける習慣がある。

ア、直前に読む語が名詞または活用語の連体形の時↓「か」

傷人乎。・人乎。

イ、直前に読む語が活用語の終止形の時↓「や」

傷人乎。

ウ、疑問副詞や疑問代詞と共に用いる時↓「や」

何傷人乎。

↓直前に読む語を連体形で読み、「乎」を「や」と読む。

けれど、この読み分けについてはけっこう曖昧で、問題集や入試問題見ても、ルールに従ってない場合もあるな。

もともと日本の古典文法では、係助詞「や」「か」の使い分けについて、疑問を表す語が伴わない時は「や」、伴う場合は「か」を用いるのが通例なんだが、そのあたりのルールは漢文訓読ではかなりいい加減になってるんだ。

一般的な傾向として、疑問副詞や疑問代詞が伴わず、「乎」などを「や」と読むときって、「有りや」の例ぐらいに少なくなってる気がするぜ。

だから、君たちは基本的に、疑問副詞や疑問代詞が伴わない疑問文の語気詞は連体形＋「か」と読むんだと思うと、まあ当たる確率が高いんじゃないかい？
って当てもんじゃだめだけどな。

日本語でもそうなんだが、疑問文には「君は行くのか？」という問い方もあれば、「どうして君は行くのか」とか「誰が行くのか」というふうには、「どうして」とか「誰が」「いつ」「どこで」なんてことばの伴う場合があるじゃないか。
漢文でも同じだぜ。

三子之才能、誰最賢哉。

▼三子の才能は、誰か最も賢なるや。

▽三人の才能は、だれが最も賢いか。

疑問文としては「誰最賢」でも成立する、というか、むしろその方が例が多い。

でも、文末に語気詞「哉」を置くことで、より疑問の語気を強めてるんだ。

こんなふうに疑問代詞「誰」とか疑問副詞「何」とかが伴う場合は、さっきの表の最後にあったように、「連体形＋や」で訓読するんだぜ。

確認しとけよ。

「乎」や「与」「歟」「耶」「邪」「哉」などの語気詞は、反語の語気を表すことも多い。

でも、疑問文みたいにあんまり単独では用いなくて、「誰」などの疑問代詞や「何」「豈」「安」などの反語の語気副詞が伴う場合、または「能」とか「可」「得」などの可能の助動詞と共に用いられる場合が圧倒的に多いんだ。

以臣弑君、可謂仁乎。

▼臣^{しん}を以て君^{きみ}を弑^{しい}するは、仁^{じん}と謂^いふべけんや。

▽臣下でありながら主君を殺すのは、仁（＝忠愛がある）といえようか。（いや、仁とはいえない。）

「可^し謂^い仁^に」なら「仁といえる」といつ平叙文。

文末に語気詞「乎」を置くことで、**反語の語気**を表してるわけだな。

ところで君達は反語って表現をわかってるかい？

念のため言っとくが、反語ってのは、「主張したいことや確認したいことがあって、それを強調するために、わざと逆の内容で問いかける表現」のことを言うんだぜ。

この文なら最初から「仁とはいえない」と思ってた、それを強めるために、わざと「仁といえるだろうか」と問いかけるわけだ。

ふつうそれに対して、その後で「いや、仁とはいえない」なんて言わないだろ？

たとえば、「こんな簡単な問題が、おれに解けないだろうか！」って反語で言って、その後に、わざわざ「いや、解ける」なんて言わないわな？

だから、ほんとに「いや、…」なんて部分はいらないんだが、その反語が何を強調してるのか確認するために、高校の漢文や古文では、わざと「いや、…」の部分まで添えて訳させるようにしてるんだ。

あほらしいといえばあほらしいが、確認のためには、わりといい手立てなんだぜ。
気になるなら、（いや、…）と括弧でもつけとけ。

豈^い愛^{あい}桃^{もも}哉^や。

▼豈^あに桃^{もも}を愛^をしまんや。

▽どうして桃を惜しんだりしようか。（いや、惜しみはしない。）

反語の語気詞は右の例のように反語の語気副詞「何^{なん}」「豈^あ」「安^{いづ}」などと共によく用いられる。

反語の語気副詞は前に説明したからわかるよな？

我々は「どうして」って訳すけど、別に理由を聞きたいわけじゃない。

以下に述べることはないと確信しつつ、一応「どうだろうか？」と打ち消しつつ問いかける語気で最初に示すんだ。

それを我々が「どうして」って自然な日本語で訳してるわけさ。

だから、右の文なら、ほんとに「どうだろ？（私が）桃を惜しむか!？」ってのが原義に近いかな。

この反語文の文末に語気詞「哉」を置いて、より反語の語気を強めてるんだよ。

「乎」「哉」や、他に「夫」「矣」などの語気詞は、感嘆や詠嘆の語気を表す。

これはもう実はうじゃうじゃあって、1字とは限らず、「也夫」とか「也乎」「也乎哉」「矣夫」

「矣乎」「矣哉」等々、2字以上の複合語氣詞として用いられることもある。

さらに、感嘆・詠嘆というが、細かく見ていくと、賛嘆、悲哀、風刺、怒気、喜びなど、いやまあ色々あるわけさ。

一応使われ方に傾向はあるものの、単に語氣詞だけを見て、それがこの気持ちと断定することはできないわけで、結局のところ、文脈からどんな気持ちかこもってるんだろ？って考えなきゃならない。

え？なんだい？「結局文脈で判断しろって言うのか？」だって？

まあそうだよ。でも、日本語だって同じだろ？

「か」ってことばだけでそれがどんな語氣を表してるのかわからないだろ？

「君がやったか」の「か」だって、疑問の場合もあれば、「そうか、君がやったか！」と驚きや感嘆を表したり、「そうか…君がやったか…」と詠嘆の場合もある。

色々なんだよ。

そのつど文脈から判断しなきゃならないってのはわかるよね。

でも、それが意味楽しいんだ。

そう、楽しいって思えるようになれよ。

形だけで丸覚えなんてつまないだろ？

惜^{シイ}乎、子^ノ不^レ遇^ハ時^ニ。

▼惜^をしいかな、子^しの^{とき}に^あ遇はざる。

▽惜しいことよ、おまえが時運に巡り会わなかったことは。

おや？語氣詞「乎」が文末に置かれてないぞ！と思った諸君、なかなか鋭いね。文中にあるように見えるけど、これは倒置文なんだ。

「子^ノ不^レ遇^ハ時^ニ、惜^{シイ}乎。」が普通の語順。

この手の感嘆文は主語と述語が倒置されることが多いんだ。

君らだって言うだろ？

「すごいなあ、君は。」とか、「楽しいなあ、漢文がどんどん読めちゃうって。」って言い方。それと同じだよ。

だから、この場合も語氣詞「乎」は文末に置かれてるって思っていいいんだぜ。

この「乎」は詠嘆の語氣を表しているというべきかな。

世が世であれば大活躍したであろう「おまえ」を、もったいないことだなあ…惜しいことだなあ…と詠嘆してるんだ。

ある意味、賛美の気持ちをこめてるともとれるぞ。

悲^{シイ}夫^は、子^こ之^の不^ル知^ラ余^ヲ也。

▼悲^{かな}しいかな、子^しの余^よを知らざるや。

▽悲しいことよ、あなたが私を理解していないことは。

これも「子^こ之^の不^ル知^ラ余^ヲ也、悲^{シイ}夫^は。」の倒置文だ。

私のことをわかってくれないという悲嘆の気持ちを「夫^は」が表してるんだ。

これらの例のように、単独で文末に置かれて感嘆・詠嘆を表す語気詞は、「かな」と訓読するのが普通だ。感嘆・詠嘆を表す日本語の終助詞として翻訳したわけだな。

「ゝなあ」とか「ゝことよ」と訳すとおさまりがいいぞ。

◎ポイント!…文末に置かれる「乎」「与」「歟」「耶」「邪」「哉」などの語気詞は、疑問や反語の語気を表す。「や」と読むか「か」と読むかはルールがあるので注意。

「乎」「哉」「夫」「矣」などの語気詞は、感嘆や詠嘆の語気を表す。通常「かな」と読み、「ゝなあ」「ゝことよ」と訳す。

・いずれも種類が多いが、たくさん漢文を読んで慣れよう。疑問なのか反語なのか、詠嘆なのかは、文脈から判断する習慣をつけよう。

⑤文末で用いられ限定・強意を表す語気詞「已」「而已」「而已矣」「爾」「耳」など

語気詞の最後が限定・強意を表すものだ。

これも教室では大事に扱われるやつだな。

「のみ」って読まなきゃならないし、訳し方が意外と難しいからね。

まず、この手の語気詞の基本が「已」だ。

あれ?見たことあるなあ…って思ったかい?

そう、完了を表す時間副詞として「すでに」って読む語だよな。

実はこの「已」は「やム」って読んで「終わる」とか「終える」という意味の動詞が本来なんだ。

そこから完了の時間副詞としての用法や、これから説明する語気詞としての用法が生まれたわけ。

だから、この語気詞「已」は終結の語気を表すんだよ。

雖^モ悔^レ之^ヲ、必^ス無^キ及^フ已[。]。

▼之^レを悔^くゆと雖^モも、必^カず及^おぶ無^なきのみ。

▽これを後悔しても、きつと間に合うことはない。

この例の場合、語気詞「已」は「のみ」と読む。

でも、訳してないんだが、「きつと間に合うことはないということとで終わり」という感じだな。もちろんそんなふうに訳すなよ。

でも、元々の語気としてはそんな感じなんだ。

だから、訳さない場合もあれば、「きつと間に合いませんぞ」と強めて訳したりする。

察^{スルニ}其^ニ所以^ヲ、皆^ニ失^ル其^ニ本^ニ已[。]。

▼其^その所以^{ゆゑん}を察^{さつ}するに、皆^{みな}其^その本^{もと}を失^うふのみ。

▽その（＝春秋の諸国が主君を殺したり国を失ったりした）理由を細かく見れば、みなその根本（＝人としての正しい道德）を失っていたのである。

この例の場合も同じだな。

「みんなその根本を失っていたということとで終わり」とか「失っていたことに尽きる」とかいう語気を「已」が表してるんだ。

ところで、限定・強意の語気を表す語気詞は「已」単独で用いられることは案外少なくて、他の語気詞や接続詞「而」と複合して用いられることの方が多いんだ。

無^{カレ}驚^ッ、吾^ニ誅^{スル}徵^ニ舒^ヲ而^レ已[。]。

▼驚^{おどろ}く無^なかれ、吾^{われ}徵^{ちようし}舒^{しゆ}を誅^{ちゆ}するのみ。

▽驚くことはない、私は徵舒を成敗するだけだ。

よく用いられるのがこの接続詞「而」と語気詞「已」からなる「而已」だよ。これも「のみ」と読む。

というか、限定の語気詞は、訓読ではみんな「のみ」って読むんだ。でも、君達はわかってきたよな？

区別するのが大変だから同じに読んでだけで、ほんとは微妙に語気は違うんだ。
漢字が多くなれば、それだけ語気は強くなるし、こもる気持ちも微妙に変わってくるはずだね。

ところで、「而已」や、後で紹介する「而已矣」とか「耳」「爾」などの限定の語気詞は、みんな「のみ」と読む。

でも、「だけ」と訳すとは限らないぞ。

むしろその方が少ないくらいだ。

「のみ」とくればすぐ「だけ」と訳すのは、君達の悪い癖だぞ。

「のみ」と読む限定の語気詞の訳し方

- ① ～だけだ。
- ② ～に過ぎない。
- ③ ～に他ならない・～だ。

子^ハ誠^ニ齊^ニ人也。知^ル管仲^ニ晏子^ヲ而已^一矣。

▼子^しは誠^{まこと}に齊^{せい}人^{ひと}なり。管仲^{くわんちゆう}晏子^{あんし}を知るのみ。

▽あなたは本当に齊の国の人だ。（齊の有名な宰相の）管仲と晏子を知っているだけだ。

今度は「而已」に、さらに必然的判断の語気を表す「矣」も併せ、「而已矣」という強い限定の語気を表したものだ。

これも実によく用いられる。

ここでは、簡単に言えば「管仲晏子しか知らない」と、あなたの知っている内容を限定しているんだ。

教科書や参考書なんかでは、「而已矣」「而已矣」なんて二種類の振り仮名が見られるんだが、あんまり気にする必要はない。どっちでもいいよ。

まあ、この例の場合なら厳密には「而已」が「のみ」と読むべき語句なんだけどね。

でも、「而已」も「矣」も断定の語気を表す語だから、その意味では「而已矣」という読みも一理あるってとこだな。

謁^{シテ}而^{シテ}陛下^ニ因^{レテ}禽^フ之^ヲ、此^レ特^ダ一力士之事耳^一。

▼（韓信）謁して、陛下因りて之を禽ふれば、此れ特だ一力士の事のみ。

▽（韓信が陛下に）拜謁して、陛下がそこで彼をお捕まえになられば、それはただ一人の力持ちのことに過ぎません。（＝捕まえるための、一人の力持ちがいれば済むことです。）

右の例、文末の語気詞「耳」は「而已」2文字分の縮約語だ。

「耳」は本来象形文字で、「みみ」の意味に他ならないんだが、つまりこれを漢文でいうと「耳^ハ耳^の耳^み」ってなる…

ん？くだらないじゃねはもういいって？ はは…。

要するに、「耳」が「而已」の発音とたまたま同じだから、「耳」一字でも「而已」と同じ語気を表すようになったんだよ。

日本語音でも「而已」は「ジイ」で、「耳」(ジ)と近いだろ？

前にも言ったように、こういうふう to 複数の漢字音を漢字1音で表現した語を縮約語っていうんだよ。中国では兼詞っていう。

要するに「耳」と「而已」は発音が同じで、同じ語気を表すってこと。

他に「爾」も同じような縮約語だっって説もある。

「耳」も「爾」も「のみ」と訓読して、**限定・断定の語気を表す**ってことだな。

テストや入試問題では、「而已」や「而已矣」より、むしろ「耳」や「爾」の字のほうが漢字の読みがよく問われるから注意しろよ。

それと、これは当然のことなんだが、限定の語気詞は、右の例のように、「惟^た」「唯^た」「特^た」などの限定の範囲副詞と呼応する形でよく用いられる。

これらの範囲副詞が用いられた文は、語気詞がなくても文末に「のみ」ってつけて訓読することが多いんだが、語気詞があればもちろんその語気詞を「のみ」って読めばいい。

非^{ザレバ}死^{スルニ}則^チ徙^ル爾。

▼死するに非ざれば徙るのみ。

▽（村人がいなくなったのは、）死んだのでなければ引越したのである。

この例は「爾」が語気詞だ。

でも、限定というよりは、むしろ強い肯定の語気を表しているんだ。

「くに他ならない」という感じがな。

村人がいなくなった理由は、それに限って定めたといえ、限定からの流れがわかるだろう？

こんなふうに、「のみ」と読んでも、必ずしも「だけ」とは訳さないんだぜ。

「而已」や「而已矣」、「耳」、「爾」などは、一般に限定を表すとよく言うけれども、実はそんな簡単な語気じゃなく、断定や、語調のポーズを表すこともある。

ここではいちいち取り上げないけれども、学校で習うことなんて、ことばのほんの一部の意味でしかないってことを知ってほしいな。

代表的なものを紹介してるだけなんだってね。

また、ここで紹介した以外にも、複数の語気詞や接続詞と合わさって、「也已」とか「已矣」、「耳矣」、「耳也」、「而已耳」、「而已爾」など、実にさまざまな表現があるんだ。

みんなちよつとずつ違う語気を表してるんだよ。

等しく「のみ」と訓読している我々にはわからないんだけどな。

◎ポイント……文末に置かれる「已」は終結の語気を表す。

「而已」「而已矣」「耳」「爾」などの語気詞は、主に限定や強調の語気を表す。ひとしく「のみ」と読むが、訳し方は「だけ」とは限らず、「くに過ぎない」「くに他ならない・くだ」と訳したりするので、文脈から判断が必要。

限定の語気を表す語気詞は、「惟^{なす}」などの範囲副詞と併せ用いられることが多い。

これで語気詞の講義は終わり。

学校や塾なんかでは、文末に置かれる疑問・反語、限定の語気詞ぐらいを大事だって教わるかな。助字って用語で説明したりするけど。

でもな、大事じゃない語なんてないんだよ。

特に語気詞は表現した人の気持ちがかもる語だから、これってどういう気持ちがかもってるのかなあ…なんて考えながら漢文読むと、味わいが増すんだよ。

楽しめよ、どうせ勉強するのならな。

さあ、いよいよ次回は基本の最後、接続詞だよ。お楽しみに。